

序論) 前回の振り返り

前回、私達は「キリスト者の自由の使い方」と題して、パウロがどのように自分に与えられた自由を用いていたのかを学びました。

パウロには権利がありました。飲食の権利、結婚をする権利、そして教会における働きに対する報酬を得る権利を彼は持っていました。それは一般的にも、そして聖書的にも保証されている権利でした。

でも、パウロはそれを用いない選択をしました。そればかりか、その権利を用いるぐらいならば死んだ方がマシだと言っていました。なぜでしょうか？ それは彼が自分に与えられた権利を利用して報酬を得ることによって、福音の妨げになることを避けるためでした。

当時は、パウロのような伝道者に限らず、哲学者たちや詭弁家たちが人々に様々なことを教えながらお金を稼いでいました。パウロはそういう人たちと同じようにお金をもらうことで、他の哲学者たちが語っていることと、パウロが語っている福音が同じようなものとしてみなされることを嫌ったのです。

だから、パウロは自分が持っている権利を手放して、福音の妨げにならないような歩みをし、そのように自分が権利を手放して福音のために生きることができることを何よりも喜んだのです。

パウロにとって自由とは、福音のために自分の権利を手放すことができる自由だった。というのが前回のお話でした。今日の箇所はその話の続きで、奴隷になる自由、自分を制限する自由が語られています。

1) すべての人を得るためにすべての人の奴隷となる

みなさんは、奴隷になりたいですか？ 普通なら、奴隷になりたくないですね。今の若い人は、「会社の家畜にはなりたくない」と言って残業することを拒んだり、3ヶ月もしないうちに会社をやめてしまったりしているそうです。

でも、パウロは、自分は自由人だけれど、あえて奴隷になるのだと語ります。なぜなのでしょう。それは自分が奴隷になることによって、一人でも多くの人が救われるためでした。19 節を読みましょう。

9:19 私はだれに対しても自由ですが、より多くの人を獲得するために、すべての人の奴隷になりました。

私達、キリスト者は基本的に自由です。ここでいう自由というのは、誰に対しても義務を持っていない、支配されていない、という意味です。私達は、神様以外の存在に対して「何かをしなければいけない」という義務を持っていません。だから、偶像の肉を食べる自由もあるし、好きなことをする自由もあります。

だから、パウロはこの後に出てきますが、ユダヤ人の律法主義にも支配されなかったし、異邦人たちの神様を無視した生き方にも支配されませんでした。

でも、パウロは人々を得るため、人々が救われるために、それぞれの人の奴隷にあえてなっていたのです。20 節から 22 節には 4 つの事例が書かれます。

それは「ユダヤ人の奴隷」「律法の下にある人の奴隷」「律法を持たない人の奴隷」「弱い人の奴隷」の 4 つです。それぞれ、パウロが具体的にどのようなことをしていたかというと、

① ユダヤ人の場合、使徒 16:3 にはこう書かれています。

16:3 パウロは、このテモテを連れて行きたかった。それで、その地方にいるユダヤ人たちのために、彼に割礼を受けさせた。彼の父親がギリシア人であることを、皆が知っていたからである。

パウロは割礼を受けなくてもイエス様を信じれば救われるということを知っていました。だから、あえてテモテに割礼を施す必要はなかったのですが、テモテの父親はギリシア人だったので、割礼をしないままテモテを連れて歩くと、パウロが語っている福音はユダヤ人の価値観を否定して、ギリシャ人にあわせていると受け取られ、それがユダヤ人たちのつまずきになる可能性があったので、ユダヤ人とギリシア人の血を持つテモテにあえて割礼を施したのです。

② 律法の下にある人たちの場合

律法の下にある人たちの場合は、使徒 21 章 21-26 節を見ると、パウロはエルサレム教会に行こうとしましたが、パウロが「割礼は救いの条件ではない」と教えていたため、ユダヤ人たちの歩みを否定しているという誤解が生じていました。

だから、ユダヤ人クリスチャンの勧めに従って、モーセの律法で定められているナジル人と呼ばれる献身の誓約に参加しました。具体的には、この時ナジル人として献身していた人が 4 人いたので、その 4 人が、ナジル人の期間が終わったことを示す剃髪式の費用をパウロが出し、パウロ自身もその 4 人と一緒に身を清める期間

を持って、律法に従っているという姿勢を示しました。

③ 律法を持たない人の場合

律法を持たない人の場合は、使徒 17 章に書かれているアテネにおけるパウロの説教では、パウロは旧約聖書の律法ではなく、アテネの祭壇に刻まれていた言葉や、彼らの詩人の言葉を引用しながら説教をしました。

また、パウロはエルサレムでの教会会議の中でも、異邦人たちに割礼や律法遵守を強制しないように語りました。

④ 「弱い人たちには、弱い者になりました」

弱い人たちに向き合う場合は、8 章に書かれていた偶像に献げられた肉のことで、信仰的に未熟な人たちは、偶像に献げられた肉を食べると悪い影響があるのではないかと感じていました。それは真実とは違う誤解なのですが、パウロは、その肉を食べる自由を手放しました。

パウロにとって、割礼もナジル人の誓約も、異邦人の文化も、偶像に献げられた肉の問題も、従う必要がないことでした。

しかし、あえてそれらに従っていったのです。それによって人々の魂を得るため、救いを得るためでした。

先日もたれた北海道宣教区の聖会において、礼拝についての講演を HBI の学院長である中川先生がしてくださいました。礼拝式という「礼拝の形」と、礼拝者という「礼拝する者がどのように生きるべきか」の両方を考えていくべきだという話がありました。

ただ、礼拝式という点では聖書は「必ずこうしなければならない」という決まった型は見当たらないので、黙示録にみられるような礼拝式の要素に従っていくべきだという話でした。確かに、必ずエルサレム神殿で礼拝しなければいけないという決まりはありません。

では、私達はどうしたらいいのか。スーツで礼拝するのが良いのか、ジーパンで礼拝するのが良いのか。中川先生は「聖書が教える礼拝の要素に従うならば、ジーパンで礼拝するような形にはならないのではないか」という方向で教えていました。

しかし、では教会としてスーツや正装を求めることによって、それが人々のつまずきになるなら、どうすべきかという考えもあります。

その逆もありますね。スーツではなくカジュアルな姿で礼拝することに対して「本当にそれで良いのか？」と考える人がいて、軽装で礼拝していることによってつまりく人がいたら、どうするのか？という問題です。

私の20代の頃は、「別にスーツじゃなくても神様は心を見るんだからいいじゃん」と思っていました。実際、旧約聖書で語られているようなエポデや祭司の服で礼拝しているわけではなく、それぞれ自分で選んだ服装で礼拝しているわけですから。

でも、「ちゃんとした格好で【主】を礼拝しないと、【主】を恐れることにならない」と強く主張する人がいました。その時、私は「僕には僕の服装で礼拝する自由があるんだ！」と主張することもできましたが、「別にスーツを着ることはそんなに難しいことではない」と気づき、それ以来、礼拝する時はスーツで礼拝をするようになりました。

みなさん、私達は自由です。でも、その自由を手放すことによって人々を得ることができる。救いに導くことができたり、その人がより【主】に近づくことができたりするのならば、自分が持っている自由を手放して、相手に合わせる、そのような自由を私達は持つべきではないでしょうか。

自分のためではなく、魂の救いのために、人々のために、何よりも【主】が与えてくださった福音がより輝くために、私達は自分が「ああしたい、こうしたい」と思っている自由を手放して、人々に従っていく。そのような自由の使い方が大切なのです。

なぜならば、自分の自由を手放す自由を使っていくときに、私達はその救われた人々と共にさらに多くの恵みを受け取る者となるからです。23節を読みましょう。

9:23 私は福音のためにあらゆることをしています。私も福音の恵みをともに受ける者となるためです。

パウロは既に福音によって救われた人です。その救われた人が、人々の救いのために自由を手放し、人々の奴隷になることで、さらに福音の恵みを共に受けると言っています。これは私達が自分の救いのためではなく、人々の救いのために仕えていくとき、さらに豊かな恵みを受けるということを示しています。

みなさん、私達が受ける恵みというのは、自分が救われるだけじゃないんです。それよりも先があるのです。

2) 朽ちない冠のための節制

だから、パウロは 24 節から【主】からの報いを受けるために走り続けることを求めています。24 節を読みましょう。

9:24 競技場で走る人たちはみな走っても、賞を受けるのは一人だけだということを、あなたがたは知らないのですか。ですから、あなたがたも賞を得られるように走りなさい。

コリントでは、オリンピックの次に大きな競技大会であるイスミア競技会というのが 2 年に 1 回開かれていました。だから、コリントの人たちは、その競技会で勝って栄光を得るために選手たちが一生懸命努力していることを知っていたのです。だから、パウロがこのことばを言ったときに、コリントの人たちは確かに選手たちが賞を受け取るために、一生懸命自己訓練に励んでいた姿を思い浮かべたでしょう。そして、パウロはその姿を思い浮かべさせて、「ですから、あなたがたも賞を得られるように走りなさい。」と命じています。

みなさん、聖書は「救われてそれで終わりです」と言っていません。確かに私達の救いは、私達の行いによるのではなく、【主】の恵みによって与えられます。だから、どんなに罪深い人でも、何もできない人であったとしても、イエス様を信じるならば、恵みによって救われます。

それはある意味で、信じるすべての人に与えられる恵みですが、神様はその恵みに応答して、パウロのように一生懸命仕える者に、さらに大きな報いを用意してくださっているのです。

みなさん、みなさんに与えられている恵みは、救われて終わりではないのです。救われた後、みなさんがキリスト者として様々なものを犠牲にし、手放し、仕えて来られたことに対して、【主】はちゃんと賞を用意してくださっているのです。

だから、パウロは、世の中の競技者が一人にしか与えられない賞のために頑張っているのならば、キリスト者の犠牲に対して用意されている賞を受け取るために、様々なことを犠牲にしながらも、キリスト者としての歩みを走り抜けなさいと勧めているのです。

そして、その賞を受けるためにはどのような走りをしたらいいかというと、パウロは、選手たちがあらゆることを節制していることを取り上げます。25 節を読みまし

よう。

9:25 競技をする人は、あらゆることについて節制します。彼らは朽ちる冠を受けるためにそうするのですが、私たちは朽ちない冠を受けるためにそうするのです。

実際、先ほど紹介したイスミア競技会に参加する選手たちは、訓練をするのはもちろんのこと、10ヶ月にわたって食べ物や飲み物を含めて、あらゆることを制限しながら自分を鍛えてきたのです。

みなさん、【主】からさらなる報いを得るためには、自分を制限することが大切なのです。

実際、私はこんな体型をしていますから、節制しろといっても説得力がないと思います。しかし、この世のアスリートたちが、この世の栄光を得るためにあらゆることを制限しながら訓練しているのならば、やがて来る永遠の世界において永遠に残る栄光を【主】から受け取るためには、この世の時間であったり、趣味であったり、お金であったり、体力であったり、その他、自分が大切にしているものや価値観などを犠牲にし、手放しながら歩んでいくべきではないでしょうか。

そうはいっても、ただ「自制しなさい」「犠牲を払いなさい」と言われても難しいと思います。だから、パウロが次に言っているアドバイスは、目標をしっかりと定めて歩みなさいということです。26節を読みましょう。

9:26 ですから、私は目標がはっきりしないような走り方はしません。空を打つような拳闘もしません。

ここでパウロは2つの目標を掲げています。一つは、自分の走る先にあるゴールという意味での目標、そしてもう一つが、自分が戦うべき敵という意味での目標です。

みなさん、私達が目指すべきゴールとなる目標はなんでしょうか。それは【主】イエス・キリストです。地上のアスリートが金メダルを目指して頑張るのであるならば、私達は【主】イエス・キリストの栄光を目指して犠牲を払い、自分に制限をかけて歩むのです。私達は、キリストというゴールを目指して歩むときに、その姿に似せられていくからです。Ⅱコリント 3:18 を読みましょう。

3:18 私たちはみな、覆いを取り除かれた顔に、鏡のように主の栄光を映しつつ、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられていきます。これはまさに、御霊なる主の働きによるのです。

私達は、キリスト者として歩もうとするとき、自分の力だけでは歩めません。御霊の助け、聖霊様の助けを受けて歩んでいきます。でも、その先にあるのは、キリストと同じかたちに変わられていくということです。

だから、私達はそのゴールを目指して、【主】イエス・キリストが私達の救いのために十字架にかかれたように、私達は私達に委ねられた周りの人たちの救いのために、教会の人たちの成長のために、自分が持っている権利や自由を手放し、犠牲を払い、自分を制限して、【主】のみ姿を目指して歩んでいくのです。

そして、私達が戦うべき敵は何かというと、私達自身です。

みなさん、私達クリスチャンにとって敵というと、悪魔とか悪霊とかサタンとか、そういった存在が頭に浮かびますが、一番打倒しなければいけない敵は自分自身なのです。

それがわかっていなくて、霊的戦いをしようとしても、何を倒せばいいかがわからなくて、ただがむしゃらに拳を出しているようなことをしていると、それは無駄骨になってしまいます。

みなさん、ボクサーが練習としてパンチを出す訓練をするのは良いですよ。でも、本番で敵がわからないで拳を出しても意味がないじゃないですか。ボクサーが勝利するためには、ちゃんと敵を見ていなければいけません。いや、練習だって、ボクサーがパンチの練習をするときには、頭の中で敵をイメージし、その敵を見据えて練習するわけです。

そうであるのなら、私達が敵を倒すためには、ちゃんとその敵を見据えなければいけません。そして、その敵とはなにかというと、自分自身なのです。27節を読みましょう。

9:27 むしろ、私は自分のからだを打ちたたいて服従させます。ほかの人に宣べ伝えておきながら、自分自身が失格者にならないようにするためです。

時々、霊的な戦いのことを言う時に「悪霊、悪霊、サタン、サタン」と言って、自

分自身のことを見ていない人がいます。直すべきなのは自分なのに、悪霊とかサタンと言いながら、自分が自分に戦うべきことを放棄してしまっている人がいます。

でも、私達は自分自身を打ち叩いて、【主】の働きをするために、ユダヤ人や、ギリシア人や、弱い人たち、強い人たち、あらゆる人たちを救うために、まず自分自身と戦っていくのです。

自分のために自分の時間を使いたいという思い、自分のために自分の欲望を満足させたいという思い、自分のために自分のお金を使いたいという思い、そして時々襲ってくる「自分のために、御心から離れたことをしたい」という思い。そういう自分を打ち叩いて、私達は【主】に従い、罪から離れ、あらゆる人達の奴隷となっていくのです。

結論)

パウロは、自分が救われたことによって手にした「自由」を、自分のためにではなく、福音のために、そして人々の救いのために用いました。

「私は自由だ。だからこそ、あえて人の奴隷となる。」

それがパウロの生き方であり、考え方でした。

私達は自由を使うとき、つい「自分がしたいこと」を優先してしまいます。しかし、パウロはその自由を「神様のために、人々のために」使ったのです。

そしてパウロは言いました。

9:23 私は福音のためにあらゆることをしています。私も福音の恵みをともに受ける者となるためです。

自由を手放して生きることは、損ではありません。

神様は、そのようにして仕える者に、朽ちることのない冠を備えておられます。

地上の競技者が、わずかに輝いては消えていく栄光のために、自分を制限し、鍛え上げるのであれば、

私達は 永遠に輝く冠 のために、なおさら自分を御言葉の前に従わせ、愛をもって人に仕えて歩むべきではないでしょうか。

そのために必要なのは、目標を見失わないことです。

私達のゴールは キリスト です。

そして、私達が戦うべき相手は 他人ではなく、自分自身 です。

9:27 むしろ、私は自分のからだを打ちたたいて服従させます。ほかの人に宣べ伝えておきながら、自分自身が失格者にならないようにするためです。

私達は、自分の中にある「自分を中心に生きたい」という思いと戦わなければなりません。

しかし、私達は一人ではありません。御霊が助け、支え、導いてくださいます。

★応答の時

兄弟姉妹、今日、神様は私達に問いかけておられます。

あなたは、与えられた自由を何のために使っていますか？

自分のためでしょうか？

それとも、キリストのため、人々の救いのためでしょうか？

私達は今日、もう一度決心したいと思います。

自分の願望よりもキリストを選ぶ者とならせてください。

自分の自由を手放しても、人々を愛し、仕える者とならせてください。

朽ちない冠を目指して、今日も主に従って歩ませてください。

今、しばらく今日のみことばを黙想し、どのように応答するのか、何を手放し、何を制限したらいいのか、思い巡らす時を持ちましょう。

そして、みことばに対する応答を「わたしの応答」の欄に書き込んでください。